

—《小特集 サッカー・アジアカップ》—

中国インターネット上のアジアカップ ——サッカーファンの行為をめぐる論争——

(名古屋大学大学院) 劉 星

I. はじめに

今夏、中国で開催されたサッカー・アジアカップでは、中国サッカーファンの強烈な反日感情が日本のメディアで大きくクローズアップされた。近年の中国で反日感情が増幅してきた原因の一つとして、これまでしばしば指摘されてきたのはインターネットの発達である。確かに、インターネットのBBS（電子掲示板）上を少しのぞくだけでも、反日的言論の横行ぶりはすぐわかる。しかし、今回のアジアカップをめぐるインターネット上の言論をよく観察すると、かならずしも反日一色ではない。むしろかなり多彩である。そこでここではそれらの言論を、ファンの行為を正当化しようとする過激派、政治とスポーツを分けて考えようと主張する穏健派、それに決勝戦以後に主流となった政府批判派という三種に分けて整理してみたい。

その前に、二点ほど説明を加える。第一に、小稿の資料は主に「超級大本営軍事論壇」（軍事・政治問題に関心を持つ者が集まる代表的BBS, <http://www.cjdbdy.com>以下cjdbdyと略称。その後の数字は月日を表す）と「猫眼看人」（左派からリベラルまで多様な意見を掲載している代表性の高い異色のBBS, <http://club.cat898.com>以下catと略称）から入手したものである。この二つのBBSはアジアカップに関しても豊富な記事と言論を掲載しており、これらによってアジアカップに関する言説のかなりの部分をカバーできるはずである。第二に、インターネット以外の中国大陆のメディアは、ファンの行為も日本国内での大騒ぎもあまり多くは報道しなかった。そのため、多数の中国人はア

ジアカップがほぼ穏やかな状況のもとで行われたと考えていると言ってよい。その意味で、アジアカップで反日的行為が噴出したという認識は、中国ではごく一部の人々が共有しているにすぎない。

II. 重慶・済南での試合

8月7日の決勝戦が始まるまで、BBS上で優位に立っていたのは過激派の言論であった⁽¹⁾。彼らは次のような論拠を挙げてファンの過激な行為を正当化しようとした。①重慶は第二次世界大戦中の日本軍の大規模空爆により多数の死傷者が出た地であり、ファンの行動には「情理」がある。②中国チームが日本で同じ目にあったことがあり⁽²⁾、今回はその報復にすぎない。③日本が歴史認識などの一連の問題において中国人の「感情」を無視している限り、中国国民も自分たちの「怒りの声」を日本に聞かせてやるべきだ（cjdbdy7/30）。④大会の組織者は日本チームに対し他のチームと同様の待遇を与え、ホストの礼儀を果たしている。ファンの行為は個人の自由に準じるもので、政府が干渉すべきことではない（cat8/4）。

一方、穏健派は、ファンには度量と礼儀が必要であり、愛国主義とスポーツ精神との間のバランスが大切だと主張した。その中には次のような発言もあった。中国人は日本の国旗と国歌に対し非常に複雑な感情を持っており、重慶のファンの不起立、ブーイングなどの行為は理解できる。またスポーツには政治的な役割があることも否定できない。しかし両者を混同して、スポーツを政治化すべきではない。日本チームの素晴らしいプレーや、街で見かける和服の姿を、日本という理由で何でも罵倒の対象とするのは良くない。それはスポーツの楽しさと人間の尊厳を見失っている。「サッカー会場を愛国主義の戦場としてみなしてはいけない」のである（cat7/25）。

また、過激派の多くも反日ブーイングが不満発

散の一種にすぎず、自分たちのやり方が必ずしも正しいとはいえないと考えていたようだ。ある者は「もし重慶の人びとにこの事件〔反日行動〕の謝罪をしてもらいたいなら、日本がまず謝罪せよ、そうすれば一週間もかからず実現できる」と述べている。この時点では、BBS上の関連記事・発言はまだ少なく、論争の焦点もファンの行為がスポーツ精神に合致するかどうかというレベルに留まっていたといえる。

Ⅲ. 決勝戦まで

決勝戦が日中対決となることが決まった8月4日以後、BBS上ではアジアカップに関する発言が急増した。とりわけ、日中両国政府の「介入」、すなわちファンの「反日行動」に対し日中両政府がコメントしたことを報じた記事がBBS上で広まるにつれ(cjdb8/4)、反日的言論が増加し、同時に中国政府の対応への批判も出始めたことが注目される。

日本政府の介入は明らかに反日感情を増幅させた。過激派の日本批判の論調はほとんど同一である。つまり、ファンの行為は政治とは無関係な自発的なもので、中国人の対日感情の自然な表れであり、なんらかの筋から教唆された結果ではない。スポーツを政治化しようとしているのは中国のファンではなく、日本政府のほうではないか(cjdb8/4)。こうして、BBSでの議論はたちまちのうちにファンの行為の問題を超え、日中間の「伝統」的な問題を論じる段階までに達した。

この段階で論戦の焦点の一つとなったのは、中国政府の発言をどのように受けとるべきかという点であった。多くの過激派は、政府の発言を、ファンの行為を黙認し日本政府に対し強硬な姿勢を表明したものと理解した。しかし、一部には政府による国民への抑圧の始まりであると見なす者もいた。これに対し穏健派は、国際社会が中国に対してもっているイメージを守るため、ファンの反

日的行為を規制すべきだと主張した(cjdb8/5)。彼らは、「一部のファンは依然として何十年も前の民族的怨恨をかき立てている。決勝戦では反日の炎がさらに激しく燃え上がって、抑え切れなくなるのではないかと」憂慮した(cat8/4)。また、「ファンの冷静さを欠く行動は、日本の一部の政治家と内外のメディアしか喜ばせない」ので、中国のメディアもこれ以上反日感情を煽るべきではない。さらに「自国サッカーに対する中国人ファンの絶望が他国サッカーへの恨みに転じたにすぎず、〔ファンは〕義和拳と化してしまった。この大会の唯一の功労はそれしかない」という皮肉な発言もあった。

決勝戦前夜、インターネット上にいくつかの論説が繰り返し転送、回覧されている。その一つは反日言論で名高い「愛国者同盟」BBSの評論である。それによれば、ファンの行為は「歴史の真相を隠蔽する日本政府の行為、軍国主義の亡霊が依然として日本列島に徘徊していることに対する中国人の不満の表明」であり、ブーイングも「まさに世界の安定維持のための平和の声」にはほかならない(cat8/7)。もう一つは、新華社発行の週刊誌『国際先駆導報』の評論である。それは、今回の日中決勝戦は歴史的な復讐戦のようなもので、「日本チームは日本の間違った歴史認識のスケープゴートに過ぎない」と述べていた⁽³⁾。これも非難の対象を日本に向けたものである。

一方、穏健的な論説も流通した。共青团の機関紙『中国青年報』は、中国は理性的な国であるというイメージを確立するためにも「寛容と理性」が必要だとファンの説得を試みた⁽⁴⁾。同系列の新聞『北京青年報』の論説も、「文明を旗印に、文明的なファンになろう」と呼びかけた(cjdb8/5)。BBS上では、このような穏健派の主張を支持する発言が一時、数多く流通するようになり、インターネット世論の流れもそちらに傾くかと思われた。しかし、日中による決勝戦が「民族的利益」

や日本の歴史認識問題と結びつけて論じられると、過激派支持の声は当然のことながら高まった。さらに、「日本は自分自身の過ちを認めないばかりか、国際社会での日本のイメージを一変させてがっている」と述べ、日本政府の介入が国際社会の同情を取り付けるためのものではないかと疑う者もいた (cjdb8/6)。かくしてBBSでは、「今度の試合はフェアプレーなんかじゃない、日中間の生死をかけた戦いだ」という過激的な発言と、「スポーツの決勝戦ではなく、『愛国主義』と『売国主義』の争いとなった」という嘆きの声 (cat8/5) とが共存するようになった。

IV. 決勝戦以後

試合後、大陸のメディアは北京で起きた出来事を一切報道しなかった。しかしファンの体験談がBBSで広がるにつれ、何が起きたかはすぐ知れた。そのためBBS上での議論も、試合自体より「中国政府は何をやっていたか」という問題が焦点となった。さらに、その後、香港、台湾、日本などの海外メディアからの報道がBBSに流れ込み、政府批判を多様化させることになった。

過激派の発言には、「日本の勝利は中国政府及びアジアサッカー連盟に圧力をかけた結果だ」と相変わらず日本を攻撃するものも見られるが (cjdb8/7)、攻撃の矛先の多くは「売国」政府に向けられるようになった。「政府は無能だ。〔ファンを弾圧した〕警察も党の番犬にすぎない。われわれは日本を守るすべてのものを取り除かなければならない」などというのがその典型的な発言である。彼らの目から見れば、中国人に自尊心を喪失させた張本人は弱腰外交を展開する政府である (cjdb8/9)。

しかし他方、決勝戦後のさまざまな「真相」の流出は、穏健派の発言力を高める要因ともなった。彼らはスポーツ精神を強調し、過激なファンを批判して次のように警告した。「政府は極端なナシ

ョナリズムの全国民的な氾濫を正視すべきである」、さもないと「党は早晚、自分の政策によって権力を失ってしまう」 (cat8/9) ⁽⁵⁾。また、中央テレビが試合の信号を30秒遅らせ、別の試合の観客席の声を使って「生中継」したことを指摘し (cat8/8)、政府が文化的な「鉄のカーテン」によって愚民政策をとっていると批判した者もいた (cjdb8/8, cat8/8)。これらの発言は体制批判に近いものだといえよう。

アジアカップでのファンの行為に関するBBS上の議論は、8月10日以後徐々に活気がなくなり、現在 (9月上旬) ほとんど存在していない。その理由の一端を、ある発言者は次のように率直に語っている。「国民の感情は長い間当局に抑制されてきた。今回の試合はそのうっぶんを晴らすための一種の媒介役に過ぎなかった。〔対日批判を含むさまざまな不満を表明する〕正当なチャンネルもないし、それを公のメディアに載せるわけにはいかないので、試合中に発散するしかない。われわれがインターネットで発言するのはそのためである」 (cjdb8/9)。つまり、今回の試合の意義は、もともと存在していた反日感情に新たな素材を追加したというより、不満を発散するために公的かつ合法的な「場」を提供したことにあると言うべきであろう。したがって、不満を発散した後、元の生活に戻るのはごく自然なことなのである。

V. まとめ

以上見てきたように、インターネット上では、アジアカップにおけるファンの行為をめぐって多様な議論が活発に展開された。ある発言者が「中国では外交政策に対し民衆による関与や議論が許されてこなかったため、数十年来、人々は日本への反感などの感情を表す機会がなかった。今日、政治の開放とインターネットの発展のおかげで、中国人はようやくこのチャンスを獲得した」と書いているように (cat8/9)、インターネットは中国

国民に対しより自由な言論空間を提供することによって、中国の言論自由の前進に一定の役割を果たしていると言ってよい。

同時に、今回のアジアカップをめぐる騒動で改めて確認されたのは、インターネット上でさまざまな不満を吐き出す際の主なターゲットとして、日本が利用されやすいということである。その原因を分析するのは本稿の目的ではない。しかし、決勝戦終了後、多方面から情報が流入したことにより政府批判と反省の声が引き出され、そのためネット上でもより客観的で冷静な声が出始めたという事実は、その原因の解明に一つの手がかりを与えてくれるだろう。すなわち、より多様性を富んだ情報源を提供することが、日本に対するより客観的かつ多元的な議論の基礎になるのではないだろうか。

[注]

(1) これらの試合の体験談は以下のURLを参照：

<http://www.cjdbby.com/dispbbs.asp?boardID=34&ID=105038&page=34>

<http://club.cat898.com/oldclub/dispbbs.asp?boardID=1&replyID=841857&ID=76241&skin=1>

<http://www.cjdbby.com/dispbbs.asp?boardID=34&ID=106121&page=34>

<http://www.cjdbby.com/dispbbs.asp?boardID=34&ID=104218&page=35>

<http://www.xfjs.net/bbs/cgi-bin /topic.cgi?forum=1&topic=3168&show=560>

(2) BBSでは、中国チームが遭遇した三つの例を挙げられている。1992年のサッカーアジアカップ (<http://www.cjdbby.com/dispbbs.asp?boardID=34&ID=106230&page=34>)、2004年のサッカーアジアクラブ選手権、2003年の女子バレーワールドカップ (<http://www.cjdbby.com/dispbbs.asp?boardID=34&ID=106402&page=32>)。

(3) 『国際先駆導報』，2004年8月6日

http://news.xinhuanet.com/herald/2004-08/05/content_1717373.htm

(4) 『中国青年報』，2004年8月6日

<http://news.rednet.com.cn/show.asp?articleID=592335>

(5) この点についてより深く議論したのは

http://www.1840cn.com/Article_Show.asp?ArticleID=4829を参照